「IT時代の“写真”のゆくえ」

ノーリツ鋼機株式会社

和歌山県に、世界のシェアNo.1を誇る企業があるのをご存じだろうか。社名をノーリツ鋼機株式会社という。同社の製品はミニラボ、すなわち写真の自動DPE装置である。写真の世界は今、大きく様変わりしつつある。日本ではすでにフィルムを使うコンパクトカメラよりデジタルカメラの販売数が上回っているという。ITによるデジタル化、ネットワーク化が進む中で、写真はどうなっていくのだろうか。同社の池浦裕男専務にお話を伺った。

世界で最初のミニラボを開発

かつて写真は、町の写真屋さんにフィルムを出してから2日〜10日間待ってはじめてプリントができ上がってきたものである。その間の待ち遠しさは、撮った写真が修学旅行や結婚式など楽しい思い出の詰まったものの場合、本当に“もの狂おしい”ほどのものだった。この、「撮った写真をできるだけ早く見たい」という人々の願望に、真剣に応(こた)えてきた企業がノーリツ鋼機である。

いわゆる“DPEビジネス”、つまりフィルムを預かり、それを現像・焼き付けして写真(プリント)として客にわたす事業の発展段階は、大きく3期に分けることができるだろう。

第1期は白黒写真の時代で、町の写真屋さんが自店内でDPEをやっていた頃である。設備も小規模で、自動化も進んでいなかったから、注文が多い場合はかなり時間がかかった。

つぎに第2期はカラー写真が普及し始めた頃で、客から預かったフィルムを現像所(工場)へ出していた時代である。もちろん今でも現像所は各地にあり、コマーシャルフォトなどは現像所へ回される場合が多い。しかしこれも、一旦(いったん)他へフィルムを出すわけだから、ある程度の時間が掛かった。

そして第3期が、ミニラボ(自動DPE装置)を導入した町の写真屋さんが素早くプリント写真に仕上げてくれる時代である。このミニラボを世界で最初に開発し、改良を加え、数々の新製品を世界に送り出してきたのがノーリツ鋼機である。

取材に訪れて驚いたのは、その施設の立派さである。緑の多い環境に素晴らしい庭、そしてホテルのような社屋だ。池浦専務によると、「外国のお客様がたくさんお見えになりますので、ホテル機能を兼ねているんです」とのことだ。

取材の第1の目的は、同社がデジタル・ネットワーキングの時代に、どのような写真の未来像を描いているのか、ということを知りたかったためである。デジタルカメラとパソコンとプリンターで人々が新しいスタイルの“写真ライフ”を築き上げつつある時に、ミニラボはどうなっていくのだろう…という疑問もあった。そんなこちらの取材意図に、池浦専務の答えは明快だった。

「いつの時代になっても、紙へのプリント写真に対する需要が減るとは思えませんし、個人用のプリンターの性能がいかに良くなったといっても、スピードが遅いことやコスト面での不満感は否めません。それに、文字情報に対して画像情報がもっている優位性、つまり色や形やその場の雰囲気が手に取るようにわかることは、ますます重要性を増してくると思いますね」

確かに、現在のパソコン用プリンターの性能では、デジタルカメラで撮った同窓会の写真を何人にもプリントして配るというような場合、よっぽど根気のある人でないとあんまりやりたくない作業だろう。そんなことをするよりも、デジタル写真も扱っているミニラボ店へ出すほうがよっぽど能率的だし、安上がりでもある。

同社ではもちろんデジタル対応のミニラボも生産しているが、現在全世界で稼働中の16万台(内約半数が同社製)のミニラボのうち、デジタルでプリントできる性能を持った製品は3%あまりだという。しかし、数年の内には、ほとんどがデジタル対応のミニラボに置き換わると見ている。

インターネットを使った新しいビジネスモデル

今回の取材で大変興味深く思ったのは、同社が今年の4月から始めた、インターネットを使ったDPEgg(デジタル・フォト・エッグ)というサービスである。これは、一般消費者向けのホームページ(http//www.dpegg.com)とミニラボ会員店向けのホームページ(http//www.qssmall.com)の2サイトからなる、今までの写真流通にインターネットの仕組みを付け加えたサービスである。

非常にうまく考えられていて、一般消費者にとっても、また同社の顧客であるミニラボ店にとってもメリットの大きいビジネスモデルである。ミニラボ店にとっては写真需要の拡大が見込めるし、消費者にとっても大変便利なシステムだ。

例えば、アメリカに留学している娘が、クラスメートとのクリスマスパーティーの様子をデジタルカメラで撮り、それを和歌山県に住む両親にプリントで届けたいと思った場合、彼女はDPEggのサイト(ホームページ)にアクセスして画像データを送り、両親が住んでいる近くのミニラボ店に頼めばよいだけである。

また、DPEggでは、ネット上に大規模な画像データベースを構築しており、消費者は自分専用のネットアルバムを持つことができる。友だちや家族にパスワードさえ教えておけば、みんなで一緒にアルバムをつくったり、画像メールを送ったり、写真についてのコメントを交換し合って楽しんだりできる。アルバムは3か月間保管され、50メガまでは無料である。また、ネットプリントサービスを利用した場合、さらに無料期間が延長できる。そればかりではなく、保管されている画像データをCD-Rに書き込むサービスもしてくれる。

デジタル写真の最大のメリットは、簡単に、しかも瞬間的に遠隔地にも画像を送れるところだろう。しかし、電子的に送れるだけでは、パソコンやプリンターを持っていない人にとってはほとんど意味がない。ところが、DPEggなら、利用者とミニラボ店がネットワークされているから、簡単にそのネックを解消できる。

ノーリツ鋼機では、今後さらにサービス取扱店を拡大し、国内最大規模のデジタル写真プリントサービス網を整備するとともに、海外への展開も視野に入れているという。それは、グローバリゼーションが進展する中で、海外との画像のやり取りやプリントなど、デジタルフォトを巡って広範なビジネスニーズが潜在していると考えているからだ。インターネット時代は、すべてがボーダーレス化する時代でもある。マネーや人や文化が国境を越えて自由に行き来する。そのような時代には、もちろん画像も国境を越えて行き来するようになるだろう。そのことを世に先駆けてビジネスにしようとしている企業が和歌山県にある。そのこと自体が、何かとてもワクワクすることのように思えてくる。

DPEggホームページ
http//www.dpegg.com

ノーリツ鋼機全景

Wakayama Business Front Line